

〔令和元年度研究会活動報告〕

モンゴル佛典研究会

研究会代表 阿部 真也

本研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究する事を目的としています。現在は、二〇一七年八月の遼寧省瑞応寺調査によって研究会メンバーが発見した新たな『モンゴル仏教史』の写本の内容と価値を明らかにするために、そのローマ字転写・翻訳をおこなっています。これまでの研究会の成果は、「大正大学総合佛教学研究所年報」の第十八号（平成八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（平成十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成二十五年三月）、第三十六号（平成二十六年三月）、第三十七号（平成二十七年三月）、第三十八号（平成二十八年三月）、第三十九号（平成二十九年三月）、第四十号（平成

三十年三月）、第四十一号（平成三十一年三月）に掲載されています。また、大正大学総合佛教学研究所の助成金によって、『モンゴル佛教史』研究（一）』（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究（二）』（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究（三）』（二〇一一年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究（四）』（二〇一五年三月、ノンブル社）の四冊を出版しました。また、最終巻が近々出版される予定です。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

旧『モンゴル佛教史』のモンゴル語写本には、チベット語版があり、ドイツ、日本、中国で三種出版されています。チベット語版からの翻訳としては、ドイツ語訳、日本語訳、モンゴル語訳、漢訳があります。そして、モンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタームを巡るものです。テクニカルタームのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献の性格等を推測する手がかりになるものと思われまます。また、人名等の音写語に異なる表記が非常に多くある、という問題もあります。

次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

これに対して、新『モンゴル佛教史』は、現時点ではチベット語の文献等関係する文献は発見されていません。内容は、旧写本と重なる部分もあります。表記上の問題は、現時点で幾つか出てきているものがあります。例えば、現代語表記と異なる表記が規則的にされている、満州語の表記の影響がある、等です。分量としては一〇七葉であり、旧写本の半分弱です。また、検討を始めたばかりですが、抄訳本である可能性もあります。旧写本と比較しつつ、検討しています。

本年度の主な研究会の活動

・毎週火曜日…17時～19時位、研究会

・日本モンゴル学会に参加(春季、19・5・18大正大学。秋季、19・11・23公立小松大学)

春期大会は、大正大学で開催されたこともあり、研究会メンバーが多数参加し、また、2名の発表もありました。

今後の予定

毎週火曜日…17時～19時位、研究会

場所…大正大学史学閲覧室(変更の可能性があります)

「大学と宗教」研究会

本研究会は、「大学と宗教」を研究テーマとして掲げ、平成二二年四月に発足した研究会であり、今年度で第三期の三年目（一期三年）を迎えている。研究進捗情報を報告し合う研究会を随時開催してきたが、そのうち主な研究報告を行ったのは以下の通りである。

【研究報告会（平成三二年二月）】

・三浦周（大正大学）「大正大学における仏教学の戦後史の調査研究」

・林淳（愛知学院大学）「愛知学院大学・駒澤大学における僧侶養成の戦後史の調査研究」

・安中尚史（立正大学）「立正大学における僧侶養成と日蓮系教団の戦後史の調査研究」

【研究報告会（令和元年七月）】

・江島尚俊（田園調布学園大学）「戦後日本の新制大学制度下における宗教関連学部・学科組織の変遷について」

・小野純一（自治医科大学）「イランの高等教育におけるイスラーム学問について」

・服部美奈（名古屋大学）「インドネシアの教育制度・宗教学校・宗教教育について」

【ミニシンポジウム（令和元年十二月）】

テーマ・宗教系大学における見学理念・自校（史）教育の現状と課題

・報告① 藤森雄介（淑徳大学）「淑徳大学における事例報告」

・報告② 瀬本正（上智大学）「上智大学における事例報告」

・報告③ 高野裕基（國學院大学）「國學院大学における事例報告」

・コメンテータ 岡田正彦（天理大学）

【研究報告会（令和二年二月）】

・宮坂清先（名古屋学院大学）「ラダック（カシミール東部）におけるチベット人コミュニティの宗教教育と僧侶養成について」

・矢野秀武（駒沢大学）「タイにおける教育制度と僧侶養成について」

・桜井啓子（早稲田大学）「イランにおける教育制度とウラマー養成について」

本研究会では、原則として各個人の研究関心に基づく研究報告を行ってきたが、十二月に開催したミニシンポジウムでは共通テーマを設定し、仏教・キリスト教・神道系の各大学における見学理念教育・自校（史）教育の現状と課題について事例報告をしていただいた。フロアも含めて非常に活発な議論を行うことができた。

さて、本研究会では、現在、『シリーズ大学と宗教Ⅲ 現

代日本の大学と宗教』を刊行すべく、研究メンバーが各々研究を進めている。今年度内には刊行をできるよう今後、も精力的に研究活動を進めており、かつ原稿の執筆を行っている最中である。なお、編集作業と並行して、「大学と宗教」研究を世界的な視野のもと発展させていくべく、下準備も行っている。研究会有志をメンバーとして、本年度の十一月には科研費への助成を申請した。同時並行ではあるが、「大学と宗教」研究がより実のある成果を提供できるよう、一丸となって努力してゆきたいと考えている。

室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表 大橋 雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。澄円は槇尾山で三部の密灌を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観蒙から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。

具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。そのため、本研究会参加者が

それぞれの問題意識のもと個別に研究を進めている。

平成二九年度までの共同研究では、翻刻・書き下し文・語注作成を行っていたが、作業速度の効率化を図り、平成三〇年度以降、第三卷より書き下し作業のみとし、注も出典の確認のみとした。本年度は第六卷の半ばまで書き下し作業を終了した。なお、本『年報』には紙数の都合上、第四卷の書き下しを中間報告として掲載した。

また、本年度は吉水岳彦氏が「浄土宗における口決相承をめぐる―澄円と聖岡―」と題して浄土宗教学院東部研究会において研究発表を行った。発表では、法然上人の往生以後、浄土宗における口決相承がどのように考えられてきたのかを概観し、澄円と七祖聖岡における口決相承について、両者の相承説を比較検討した。

次年度の共同研究では、引き続き第六卷以降の書き下し作業を進め、個人研究についても精力的に口頭発表や研究論文の発表を行っていきたいと考えている。

また、これまでに行ってきた研究作業データを再整理し、出版に向けた準備も順次進めていきたい。

〈参加メンバー〉

代表者	大橋 雄人
参加者	吉水 岳彦 郡嶋 昭示 舍奈田智宏 工藤 量導 岩津 英資 杉山 裕俊 長尾 隆寛 安孫子稔章 勝崎 裕之

後藤 史孝
青木 篤史
峯崎 就裕
春本 龍彬
長尾 光恵
星 里見
俊明 奎周

中世東国仏教研究会

研究会代表 大八木 隆祥

当研究会は中世東国仏教の実態解明を目的に発足したものであり、本年度まで称名寺所蔵・神奈川県立金沢文庫管理、国宝・称名寺聖教の写本『仙芥集』（一三函一―一―）三二の翻刻を進めてきた。『仙芥集』は鎌倉時代の真言僧である定仙（一二三三―一三〇二）の受法記録を、定仙の弟子の智照がテーマごとに編集したものと考えられる。

当研究会では昨年度までに一三函一―一―から二七までの二十七冊の翻刻を終えており、本年度は二八から最後の三二までの五冊を翻刻し、これを今号に掲載した。以下、本年度翻刻分の概要を記す。

①一三函一―二八「御遺告聞書〈小野〉」

空海の『二十五箇条御遺告』（ただし後世の仮託）についての註釈である。註釈者については、文中に「已上信珠律師説也」とあるので、小野流に属する信珠律師と称される人物の口説を記したものであることがわかるが、信珠律師については詳らかでない。奥書に記された日付から、おそらく増瑜（一二一九）からの勧修寺流伝授の一環で記されたものであると考えられる。もしそうであるとすれば、本文中の「仰せに云く」は信珠律師の説、「私に云く」は

増瑜の説と考えるのが妥当か。

②一三函一―二九「灌頂行事口伝〈小野〉」

勧修寺流の伝法灌頂についての口伝である。定仙は増瑜から受法した寛典方、栄然方、真慶方を中心に、憲静（一二二五―一二九五）から栄然方、裔位（生没不詳）から真慶方、定宣（生没不詳）から栄然方を受法している。文中識語に「常陸法印説也」とあることから定宣の説を中心に行っているとと思われるが、本文中には他にも「卿阿闍梨（増瑜）行事には」「願上人（憲静）の説には」とあることから、勧修寺流を受法した諸師の口伝をまとめたものであることがわかる。この他「若宮僧正御房、若宮にて授けありし時は」など、当時の鎌倉の地における勧修寺流の灌頂の実際に関する記述もあり興味深い。

③一三函一―三〇「金宝鈔聞事 妙鈔聞事 玄秘鈔聞事 灌頂護摩菩提心論事」

表紙に記された通り『金宝鈔』『妙鈔』『玄秘鈔』『灌頂護摩』『菩提心論大事』についての口伝を記したものである。ただし、そのあとに『秘藏金宝集』についての口伝も記されている。聖教のタイトルから三寶院流であることは明らかであるが、誰から受けたものかは判然としない。定仙が三寶院流を受法した五師の内、この時期に確実な交流が確認できるのは、意教流の義能（生没不詳）と、三寶院流系

統の四つの流を相承する公然（二二五二一）の二師である。
この内のどちらかの口伝を記したものが。

④ 一三函一—三二

表紙は欠である。本文の見出しには「付不動法記之」「付胎藏次第記之」「大法秘法事」とある。奥書が無いので成立の状況は不明であるが、わずか五丁表裏の中に「了（一）上人云」「了（二）上人説也」と九ヶ所記されていることから、本冊全体が了一房公然の口伝に拠っていることがわかる。公然は定済から憲深方、頼賢から三宝院御流と意教流、経寛から遮那院流という、三宝院流の末流四流を相承している人物である。

⑤ 一三函一—三二

本冊は零葉であり、その内容は『仙芥集』翻刻⑤収録の一三函一—二六『仙芥集 hona 要抄〈行海〉』の一三丁裏一行目から一五丁表二行目二文字目までと全同である。同書の草稿か。

以上で『仙芥集』全三十冊・草稿二点、計三十二点の翻刻を完了した。

この成果をもって次の段階に進みたい。

仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表 森 寛

仏教文化におけるメディア研究会の第二期活動では、現代のメディアから読みとれる、時代とともに解釈と改訂が重ねられ、再生産されてきたブツダに関する表現を事例とし、仏教的人物の表象が創出する仏教の文化的イメージとそれが社会へ与えた影響について見ていく研究に取り組んでいる。

二十世紀に入ると、科学技術の発達により多種多様なメディアが出現し、活字を主体とした印刷物は、他媒体との影響関係に置かれ、メディアを越境したコンテンツ展開を見せるようになる。近現代に起きたメディアの多様化は、情報の伝達と受容、創作に臨む環境、知の条件と思想をめぐる捉え方など、人間社会のあり方と文明の成り立ちを変えてしまうほどの大きな世界の転換をもたらす。

このポストグレートンベルクと呼ばれる潮流のさなか、諸媒体からは、実にさまざまな仏教をモチーフとしたテキストやイメージが生み出され、布教、教養、修身、娯楽など、さまざまな目的をもって人々に受容されている。このなかには、ブツダに関する表象も存在しており、仏教の文化的イメージを形成するものとして、今もなお、時流や世相に合わせた改訂と再生産がなされ続けている。

本研究会では、そのような創りかえられる仏教的人間の表象へと反映された思想、価値観、習俗、政治、経済、教育、娯楽、芸術、学術、性別などのイデオロギー的諸觀念について読み解いていく。この考察を通して、国家、民族、階級、業界、組織、或いは、それらを越境していく人間関係の総体として現れる社会空間の場で、時代的趨勢に応じて形成された宗教表象が、媒体を介して、個人や集団へ受容されていくプロセスを探り、近現代という時代のある共同体や言説空間で共有された仏教の文化的イメージについて明らかにしたい。

本年度も毎月二回ほど定例会を開催し、大正大学総合佛教研研究所へ所属する研究員と外部研究員を中心にした研究分担者の間で、各自の課題を深化するべく報告と批評を行った。その中では、本研究の重要文献となるロラン・バルトの『神話作用』（現代思想新社、一九六七年）、ジャック・ザイプスの『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』（新曜社、二〇〇一年）と『おとぎ話が神話になるとき』（紀伊国屋書店、一九九九年）の読み合わせを実施している。

また、活動と並行して第一期からの懸案であった共同研究会成果の商業出版化にも着手した。年度初めから各研究分担者へ原稿執筆の指示を出すと共に、東京神田神保町の勉強出版株式会社と交渉を進め、顧問の村上興匡先生に確認していただいた後、九月末の段階で入稿の運びとなった。

厳正なる確認作業を経て採用されたのは、森 寛、嶋田毅、寛氏、猪股清郎氏、渡辺隆明氏、大澤絢子氏、高橋洋子氏、渡辺賢治氏の論考であり、加えて大道晴香氏、今井秀和氏の寄稿論文も収録できる事となった。仏教的人間像の表象を統一テーマとした全十章の内容構成でまとめることができたが、一方で、論考の選別を重ねた結果、掲載を見送った原稿も出たことは非常に残念である。

しかしながら各方面からのご協力によりかたちとなった書籍は、それまであまり注目されていないメディア領域の宗教表象へと切り込む論集に仕上がりを見せた。このなかには、既存の宗教研究からとりこぼされた問題も含まれている。出版を通じて、読者からの反応や意見を待ちたいところではあるが、いずれにせよ、今後、森の科研究研究成果も収録した本書が新たな仏教文化研究の展開へとつながる一つの道標として活用されることを切に希望する。

なお、書籍については、『メディアのなかの仏教―近現代の仏教的人間像』（A5判・上製カバー装・三八四頁）というタイトルで、二〇二〇年三月末日に刊行される予定である。

梵語仏典研究会

研究会代表 横山 裕明

本研究会は、大正大学の伝統的な梵語仏典研究を受け継ぐ研究会として、平成二十八年より従来の「声聞地研究会」・「律経研究会」・「サンスクリット修辭法研究会」という三つの研究会を一つに統合して始動した。これら三つの研究会の実体は研究グループとして保持しつつ、グループ間の行き来を自由にして研究者の活動の幅を広げることで伝統的学問の継承とさらなる発展を目指して研究活動に取り組んでいる。各研究グループは引き続きの内容として次の研究活動を行った。

まず声聞地グループ(昭和五十四年度より共同研究を開始)は、第一瑜伽処から第四瑜伽処までの全四章からなる『瑜伽論声聞地』の校訂テキストと訳註を作成している。本年度は校訂にあたり先行研究を参照し「第四瑜伽処」全体の科段について検討した。その後、「第四瑜伽処」後半部(シユクラ校訂本四七〇頁)について、校訂テキストと訳註の作成作業を開始した。現在は「内事」(シユクラ校訂本四七四頁)までの検討を終えたところである。

次に律経グループ(平成十四年度より共同研究を開始)は、平成十三年に出版された『チベット・ウメ字転写梵文写本集成影印版』に含まれる『律経』および『律経自註』

写本の解説を進めている。本年度は印度学仏教学会の際などに京都薬科大学の岸野亮示講師と諸律文献について最新の研究情報を交換し、『律経』や「根本説一切有部律」の内容についても意見を交換した。本年度の研究計画としては復旦大学、四川大学、大正大学総合佛教研究所律経グループの共催で The Third International Workshop for Gunaprabha's Vinayasūtra を開催する予定であったが、参加者の日程が合わず来年度以降に延期した。律経グループの活動としては、本年度も昨年度と同様に『律経』「雜事 (Kandakavastu)」について解説を進めた。次年度も Luo Hong 教授(四川大学)、Liu Zhen 副教授(復旦大学)、岸野亮示講師(京都薬科大学)とともに『律経』ならびに諸律文献を研究していく予定である。

最後に修辭法グループ(平成十九年度より共同研究を開始)は、全五章からなるヴァーマナ(Yamana)著『詩の修辭法の手引・註 (Kavyalankarastūtrayīti)』のローマナイズと訳註を平成二十四年度より順次、当研究年報に発表している。本年度も引き続き第五章の読解を進めてきた。「詩作への」使用について (prayogika) と称する第五章は、二つの課から成り、全一〇九のストトラから構成される。一七のストトラから成る第一課は「詩の慣習 (Kāyasaṃāyā)」を主題とし、九二のストトラから成る第二課は「言葉の正確化 (śabdastuddhi)」を主題としている。第五章については一通り読了したが、第五章第二課を

正確に解読するにはサンスクリット文法学の知識も要するため、文法学に関する先行研究も併読している。そのため、現時点では和訳の公表には至っていない。サンスクリット修辞学に関する研究は、サンスクリット文献の厳密な解釈ならびに翻訳法の確立にも役立つことがこの一三年間の共同研究から判明しているので、インド・アールヤ語の原典を扱う幅広い分野の研究者に積極的な参加を呼びかけるものである。

密教聖典研究会

研究会代表 駒井 信勝

当研究会では、『不空羅索神変真言経』と『理趣広経』の二本の経典を読み進めている。

まず前者の方は、『不空羅索神変真言経梵文写本影印版』を基礎資料とし、対応するチベット語訳および漢訳を適宜参照しながら精読している。これまでの研究成果は、「Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapaśākalparāja (I) ~ (VII)」およびサンスクリット語校訂テキストの Preliminary Edition に試訳を加える形式で研究成果を報告した「Amoghapaśākalparāja: Preliminary Edition および和訳註(1)~(3)」として『大正大学総合佛教学研究年報』において報告している。

現在は、『大正大学総合佛教学研究年報』への報告を一度中断し、担当者たちが各自残りの写本をテキスト化する作業を進めている。同時に、既に発表済みの箇所に関しても、同じ体裁でテキストの公開ができるように入力を行っている。

後者の方は、『理趣広経』の校訂テキスト作成とその読解を行っている。

本経はチベット大蔵経において、前篇の「般若分」(Śrīparamādyā-nāma-mahāyānakalparāja)と、後篇の「真言分」(Śrīparamādyā-mantrākalpakhaṇḍa-nāma)に二分さ

れて収録されているが、前半部分に相当する「般若分」の校訂テキストの報告は終えることができた。そして昨年度の『大正大学総合佛教学研究年報』から、新たに「真言分」のチベット語訳校訂テキストの報告に入った。

今年度の研究会は、研究会のメンバーが各自多忙となり、以前のようなペースで研究会を開催することが難しかった。来年度より、今後の研究計画を見直し、両経の全容解明を目指すし、その成果を報告していく所存である。

仏教史料研究会

研究会代表 石井 正稔

当研究会は歴史学の立場から古文書や古記録といった仏教関係史料を取り扱い、研究を進めることを目的とした研究会である。

研究会メンバーは次の九名である。

- ・石井 正稔（総合佛教学研究所研究員）
- ・濱田 由美（総合佛教学研究所研究員）
- ・加瀬 丈舜（総合佛教学研究所研究生）
- ・久保田 綾（総合佛教学研究所研究生）
- ・上條 駿（総合佛教学研究所研究生）
- ・柳田 良道（大正大学専任講師）
- ・藤田 祐俊（大正大学講師）
- ・風間 弘盛（真言宗豊山派宗学研究所研究員）
- ・熊野 秀一（真言宗豊山派泉蔵寺中）

主な活動内容は、平成二八年九月に実施した真言宗豊山派金乗院（千葉県野田市清水）の史料調査および内容の整理作業を進めている。

金乗院は、応永五年（一三九八）の開基と伝えられ、近世期には本寺と檀林の寺格を有し、近隣寺院を統括していた。

そうしたことから、同寺には、檀林・本末関係などを示す史料群が多く残されている。同寺の蔵には古典籍を含む史料が多く収蔵されているが、これら金乗院所蔵史料は市史や県史などにも収められておらず、未整理の状態である。

今年度の主な活動内容として、昨年度から引き続き『大衆帳（交衆帳）』に着手した。

研究会の立ち上げ当初より着目していた史料の一つである『大衆帳』は、文政年間（一八一八～一八二九）の本山との交衆に係るもので、論議（報恩講）が実施される度に作成された名簿である。一覧すると、法麿の浅い者が年を重ねる毎に上座へと昇っていき、やがては名簿上から名前を消していることがわかる。同様に、上座にいて名前が消えた者でも、一定の期間を経ると再び名前が記載されており、そうした内容から金乗院を拠点とし在地において活動した僧侶の様子を垣間見ることができる。

まず、作業として『大衆帳』のデータ入力を研究会メンバー全員で分担しておこなってきた。担当者および担当箇所は次の通りである。

- ・石井 画像データ No.537 ～ 570
- ・熊野 画像データ No.571 ～ 618
- ・濱田 画像データ No.619 ～ 658
- ・加瀬 画像データ No.659 ～ 696
- ・久保田 画像データ No.697 ～ 737
- ・風間 画像データ No.738 ～ 764

・藤田 画像データ No.765～790

・櫛田 画像データ No.791～808

入力作業は既に終了しており、データを統合しメンバー全員での解読できなかった文字を読み説いていく等の確認作業をおこなっている。

今年度は、石井・熊野が担当したデータの確認作業まで一旦終了し、紙面掲載の準備を進めている。しかし、凡例等の詳細を定義していない為、早急に解決していく。

次年度も、『大衆帳』データの確認作業を中心に活動をおこない、年報等の紙面に掲載し、成果として発表できることを目指していく。

更に、取り扱っている史料の性質上、寺院の本末関係・檀林制度・移転寺制度といった近世新義真言宗史の実態についての理解を深めておかなければならない必要がある。そうした知識の向上を図りながら研究会を進めていきたい。

頼瑠撰『真俗雜記問答鈔』 訳注研究会

研究会代表 小宮 俊海

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑠僧正（一二二六～一三〇四）が、その時々々に記したものを集成した著作である。その内容は一千三百二十余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項はもとより、頼瑠自身の夢記や和歌、さらには公家に対する修法や諸家との書簡、和歌論や世典に関する記事など、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、中世を生きた頼瑠の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までも窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。

本書は、古来より三十卷・二十四卷・十一巻など種々の説があり、また写本によって巻順の移動や内容の増減が著しい。すでに『真言宗全書』第三十七巻に、高野山南院松永宥見師蔵写本を底本とし、二十七巻本の体裁をもって活字化されているものの、校訂テキストとして未だ不十分とされる。

そこで本研究会は、各所の諸写本を聚集し校訂し、なかでも巻数の揃った最も古い写本である、智積院新文庫蔵本を底本として【本文】を作成し、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二十五冊のうち、整理番号・新文庫三一四―（二五―）に相当する一冊の中間部分（五丁表―一〇丁裏）である。本書は、外題に「真俗雜記卷四」とあり、内題は「秘藏口伝鈔第四」とある。この「秘藏口伝鈔」という名称は、その内容に起因するものと考えられるが、外題との関係性については今後の課題である。

これらも勘案し、本書を「巻第四」と定め、今回報告する中間部分を、仮に「巻第四ノ二」とした。巻第四ノ二に収録される条目は次の通り。

- 八〇 釈論中染浄本覚隨縁不失自性事
 - 八一 染浄本覚俱有衆生流転果後方便事
 - 八二 釈論所説上下二転即可云流転還滅耶事
 - 八三 十六大生具経畢後成阿闍仏事
 - 八四 十六生之位可有超越証事
 - 八五 一切衆生本有菩薩文衆生言除非情草木事
- 本年度は以上、六つの条目について各担当者を振り分け、研究会において本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。次年度以降も、引き続き訳注研究を進め、「巻四ノ三」を順次発表刊行予定である。

近世唱導文芸研究会

研究会代表 平間 尚子

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世の唱導関連文献を対象として、翻刻を行ない、唱導資料の読解、および引用された文献資料の流布や展開などを研究している。研究会における当面の目標は、『類雑集』を広く学界に紹介し、また翻刻などを通じた研究成果を報告することである。

『類雑集』は、近世に編纂されたと考えられている唱導資料で、版本は、つぎの二点がある。一点目は、「慶安四年^卯曆十月吉辰 石黒庄太夫板本」の奥書を有するもので、二点目は、「明曆三年^丁三月吉辰 秋田屋平左衛門板行」の奥書を有するものである。どちらも、全十巻および総目録一冊の計十一冊で、同じ版木を用いて刷られている。版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。このように、活字化されていない『類雑集』の翻刻作業を行なうことは、唱導分野の研究の進展に寄与できるといえる。

本研究会では、平成二十三年度から『大正大学総合佛教研究所年報』に、一巻ずつ翻刻を報告してきた。また、翻刻作業と同時に、引用文献の調査ならびに校合を実施している。翻刻掲載時には、脚注に典拠名と校異を示した。また、

資料の状態を忠実に再現するために書き入れの場所や内容についても指摘をしている。

今年度は、総勢八名の会員を中心に研究会を運営し、『類雑集』巻十「含蔵門」の翻刻を行なった。また翻刻以外では、昨年度翻刻を行なった『類雑集』巻九に引用された文献資料の流布に関する課題について、写本等の調査を行ない、寺院文化圏における唱導資料の流布の一端を確認することができた。具体的には、『類雑集』に収載された資料が、複数の寺院において書写されていることが明らかとなった。それらの詳しい成果報告は、稿を改めて順次報告することにした。

『類雑集』は、国文学者において、以前より資料的価値が認められていたにもかかわらず、活字化がされていないことにより、研究が俟たれている状況にある。くわえて先行研究により、『類雑集』は日蓮宗関係寺院圏内における需要があったことが指摘されている。これらの指摘を参考にしながら、徹底して資料を読み解くことで、『類雑集』をはじめ近世における唱導書のあり方の一端を紐解くことが期待できると考えている。

翻刻は、本年度をもって完成したが、約十年間に渡る研究の途中では、翻刻担当者の出入りがあった。

来年度以降は、『類雑集』研究の総まとめとして、従来取り組んだ『類雑集』の出版調査における未詳箇所考察に取り組みたい。また『類雑集』をおして明らかになっ

たいくつかの報告を進めていく所存である。